学術会議第13期を終えて

早　川　幸　男*

田中春雄さんの急逝によって第13期の学術会議会員に任命され，3年近くの後任期間をつとめてこの程退任することになった．この間の活動状況，春の総会，夏の第4部会の様子を報告すると共に，来期への申し送りを記したい．

田中さんの後任として第3常置委員会に属し，学術動向の現状分析及び学術の発展の長期動向に関する資料を得るため，アンケート調査を実施し，その結果をまとめる仕事をした．これに対して，天文学研究連絡委員会と日本天文学会が労をいとわず協力して下さったことに対してお礼を申し上げたい．この結果は「日本の学術研究動向」として出版された．天文学については第2章第4節の物理科学の項に含まれているが，他の項にも天文学に触れた部分があるので，他の専門分野と比較してわが身を省る意味も含めて，この節全部と第1章総論は読んでいただければ幸いである．

第4部としては，前回の報告にも記したように，研究員制度を拡大する学術会議勧告を実現させるために努力したが，他部の賛成が得られずにこれを断念しなければならなかった．そこで次期における検討に望みを托して，今期は第4部報告：上級研究員制度の新設について（基礎科学振興・充実のための一方策）を出すのに終った．この報告の立案，起草等の実務に当った人がすべて第14期には会員でなくなるが，新しい会員が学術会議の複雑さに恐れず，基礎科学振興のために尽力して下さることを期待したい．

会員として申し訳なく思っているもう一つのことは小委員会の設置に関することであった．これは田中さんの強い遺志であったが，私の力が及ばず不本意な結果になってしまった．すなわち，第4部から34の小委員会の設置要望が出されたが，認められたのは8小委員会だけであった．専門分野による相違がここにも現われたというべきであろう．

考え方や風習の差異が別の形で鋭く現われたのが南ア問題であろう．その底には経済問題があるという説も聞くが，結果において日本が国際学界において悪い子になってしまった．直接衝に当った近藤会長や久保物研連委員長にはまことに御苦労様と申し上げる外はない．第4部としては，むしろICSUが不当と思われるから当方の主張を認めてもらうよう努力しようという意見になった．天文関係ではまだこの問題に遭遇していないが，今後国際会議の組織に当る人は十分注意していただきたい．一般会員にはこの紹介文だけではわかっていただけないであろうが，正常ならばわかる必要のないことであるはずである．

国際関係については歯ぎしりしなければならないことが続いた．学術会議が主宰する国際会議は年間4件と制限されたままである．また国際会議の代表派遣は4部関係で年間12～13件に限られている．これらの枠を持ち上げるためには，無駄とは知りつつも研連から積極的な要求を出していただきたい．

さて第14期への引継ぎであるが，上記以外に研連の構成について触れて置こう．お役所仕事の結果，公式には暫く研連が存在しないことになった．何故という質問に答えるのはめんどうなので，法規とはこういうものだと達観していただきたい．天文学研連の構成は杉本会員の責任になるが，幸い天文学会が早々に委員候補者を推薦してくれたので，実質的には手間取ることはないと思う．次期の定数については，天文学研連も日食専門委員会も第13期の定数が適当と思うと申し送ってあるから，第14期でこれが変更されることはないと信じている．その上，天文学研連の出席率は86%で，勧告を提案した地図学研連の87%に次いでいるから，22名の定員を削ることはあり得まい．ただ心配なのは研連委員の通算任期の上限が3期なので，これに引っかからないように委員の温存を考慮することである．そのためにはIAU等の役員をはっきり定義して，任期の枠外にしておくことを忘れてはならない．したがって，IAU総会が終った後に役員を枠に入れ，それと一般委員とを区別して研連を構成する必要がある．

なお研連の活動については，今まで以上に積極的にして下さることを希望する．学術会議を活性化するのに一番大切なのは，一般研究者の熱意にあふれる圧力である．

☆　☆

☆　☆　☆

* 名大　Satio Hayakawa